

我々は我々の愛する者に対して、自分が幸福であることよりなお以上の善いことを為し得るだろうか。

(三木清著『人生論ノート』より)

コロナ禍で、親族が集まって亡き人を「偲ぶ」ことが難しくなっています。この「偲ぶ」とは、どういう態度のことなのでしょう。右掲の「我々の愛する者」という言葉を「亡き人」と置き換えるならば、亡き人の本当の喜びは、その方から願われた存在である私が幸せになること以上のものはないということでしょう。そのことに気づかせていただく歩みが「偲ぶ」ということです。

慌ただしい日常を振り返り、本当の幸せを恵まれるいのちの歩みを、仏さまのみ教えに訪ねてゆきたいものです。

法事のご縁は、死してなお亡き人から案じ続けられている我が身に気づかせていただくものなのですから。